
next to **G O D**

酉木 言心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

next to GOD

【NNコード】

N5406E

【作者名】

西木 言心

【あらすじ】

日本に降り立った外国人2人組。彼らの荷物の中には刃渡り20センチを優に超えるナイフ、拳銃、身の丈ほどもある大刀が入っていた。何のために彼らは日本に来たのか。それは『神』のみぞ知る。

(前書き)

えーと、この小説に登場する人物やその他諸々はフィクションです。お話の舞台についてですが、全く本物を知りません。雰囲気で使っています。
いや、マジで「めんなさい」。

日本。

東京国際空港の国際線ロビーに降り立つた2人組は、明らかに異質であつた。

16、7歳ぐらいと見て取れる少女は、腰まであるプロンドの髪を半分程黒いリボンで結い、残りは無造作に肩から流している。その髪を受け止めるのは時代錯誤甚だしい純白のマンドであり、その下に黒いチューニック、下半身は黒いパンツに膝まである白いブーツで身を固めている。

かたや、19、20歳程と思われる赤みがかつた茶髪をツンツン立たせた青年は、カーキ色の軍服風ファッショソで身を包み、余りにも右側の方や、左側の方をナメきつた出で立ちである。

しかし、国際線ロビーの人々が彼らに向けた視線は奇異な服装が為ではなかつた。

少女は後ろ腰に刃渡り20センチはあるうかというナイフを帯び、左腰にはあからさまに自動式拳銃と、そのホルスターを携えていた。はたまた青年は背中一杯に本マグロを捌くのでも役不足のよう、肉厚で幅のある大刀を背負つていた。

断つておくが、この青年、身の丈はまず180は下らない。男子でも長身の部類に入る程であることはまず間違いないだろう。

ともかく、普通なら出発した国の搭乗口でお繩を頂戴するような物騒なブツをなんと云うことが、テロだの何だのピリピリしてて空の世界へ持ち込んでお咎め無しとは云ふ如何に。と言つたところである。

さらに降りたつたのは世界でも稀に見る平和ボケ国家、ニッポンである。銃刀法だの何だのを我関せずで罷り通つたのである。

だが彼らにとつて、この異常は常のことである。なにぶん物騒なブツは2人の商売道具で、その商売がなければ、

世界は崩壊するであろうから。

所変わつて、とある学校の人気がない場所でまあ顔をグジャグジャに歪めて泣き伏してゐる女子学生が居るとする。

泣き伏してゐる理由は一日置いておこつ。とにかく彼女は何らかの理由で泣いてゐるのであつて、後何分か泣きはらせばスッキリするのが普通である。

しかし、その何らかの理由が連續して発生していれば話は変わつてくる。回数が増えれば増えるほど、感情はやがて自分以外の誰かに矛先を向ける。

仮にその彼女が泣き伏す理由が幾度と無く続き、世を恨み、青春を謳歌する自分以外の生徒達を嫉むようになればそれは顔を出す。

泣き伏してゐた彼女の顔が引きつり激しい痙攣がおこる。性急な呼吸と共に彼女の肢体は急激な変化を迎えていた。

そしてそれから数日間で、その学校は生徒の大半が鬼籍に入つたといつ。

話を物騒な2人組に戻そう。

現在、あの2人組はどこぞのホテルのスイートルームに居る。

その部屋には2人組の他に紅色の中国服を身に纏つた14、5程であらう少女も居て、中国服の少女がやたら豪勢なイスに座り、2人組の方の少女は中国服の少女の前にある一人掛けのソファーに座り、青年が壁にもたれ掛けている。

そして、後のホテル側の迷惑なんぞ省みず、ジンベイザメぐらい捌けそうな大刀がスイートルームの床に打ち立てられていた。

「生憎、アンタらの実家からの討伐要請がある個体は小康状態でし
て、今は出向いてもらうわけにもいかないんざますよ」

「冗談めいた口調は直せ、雛翅^{スウチ}。それよりこの状態、どうしりと?」

まず中国服の少女が口を開く。それに応酬したのが2人組の方の少
女である。

どうやら中国服の少女は雛翅^{スウチ}と言つ名うらしい。

「あーあー解つてるつてレベツカ。小粋なチャイニーズジョークと
して受け取つてもらえねーのかなー」

「少なくとも、貴様が助力者^{バトロイ}でなければ首を落とすか蜂の巣にして
いたところだ」

再び雛翅とレベツカと言つ2人組の方の少女の応酬。

レベツカは自身の灰色の瞳に僅かばかり苛立ちを見せ、青年は2人
の少女に冷たい視線を送るばかりである。

「顔は特上なのに性格は残酷でやがんの・・・

まーいいや、個体が活動を再開し次第アンタらには動いて貰うら
しいよ。

それまでは自由時間つて事で東京観光でもしどいたらどうだ? レ
ベツカなんかはナンパされまくりかもな、キシシシシ

「・・・・・」

「わ、分かつた分かつた! 小粋なチャイニーズジョークだからそ
の拳銃はホルスターにゴーバックプリーズ?」

「いざれ本当に殺してやろうか、それがこの世の為になりそうだ」

「そんくらいにしどけ、レベツカ。確かに忌々しいが雛翅は曲がり
形にも助力者だ、殺したらおマンマの食い上げだぞ。」

青年の第一声はなかなかに辛辣であった。

「ハロルドお、助かつたよおお。」

ハロルド、言つまでもなく壁にもたれ掛かっている青年の事である。

「都合の良いよつに解釈すんな、雛鳥。あんたより条件がよくて性格もいい助力者が現れれば即座に手を切るからな」

「ええええ、そんな事言わないでよお。ホテルの部屋は普段よりワンランク上げてるからさあ～」

「よし、手を打とう」

「現金野郎め。・・・ほい、アンタらの部屋の鍵。安心しな、ちやんと2部屋とつてるから。」

実を言つとこの雛鳥、以前この2人組を相部屋にして殺されかけた事があつたのである。

「トーゼンだ、雛鳥。年頃の生娘と相部屋なんぞしたら息が詰まる」「こつちこそ願い下げ、ハロルド破廉恥だから」

「なつ・・・誰が破廉恥だ！ 誰が！」

「さあ？」

「ああああああ殴りてえええ」

「・・・痴話喧嘩はそこまで。

何？ アタシへの見せしめ？ 続きならびつちかの部屋でやつてよ
ね

「・・・・・・・・・・・・

それ以上痴話喧嘩をするでもなく、レベッカと破廉恥、もといハロルドはスイートルームを退室していった。

「どーすんの？ 」の穴

雛翅膀と、大刀が突き刺さった後の穴だけ残して。

「相変わらず空気が汚い、人が汚い、車は五月蠅い。オマケに隣が破廉恥だから尚最悪」

「まだ引っ張るか、それ」

スイートルームでのやりとりより数刻、レベッカとハロルドは東京の雑踏の中にいた。だが、彼らに雑踏は余り関係が無いようだ。言うまでもなく、ナイフに拳銃、大刀の組合せに近づこうなどと考えるどアホは居ないのである。

「そんなに汚い空気が嫌なら」ヨーキョにでも行きやあいいのに
「人がいない場所に屯たむろして私達の仕事が成り立つ?」
「はいはい、さいですか、分かりまし・・・」

ハロルドが最後の言葉を口から放り出そうとした直後、2人の前方

やや右側より絹をも裂けそうな女性特有の甲高い悲鳴がほとばしる。衆人がその声に振り向くと同時に、声を発したであろう女性は人にあらざる大きさの掌に握りつぶされた。

恐怖が伝染する。今まで存在した人の流れは突如乱され、恐怖の根源より人は距離をとろつと迷走する。わずかに間をおいてレベッカの携帯電話から無機質な呼び出し音が鳴りだした。

「レベッカ、新宿区内で小康状態だつた個体が活動を再開した。即座に撃破しろ。」

電話の主は雛鳥であった。その口調は先程のふざけたものとは一変、どこの司令官もかくやという物である。彼女はレベッカ達がその場に居合わせているなど思いもしなかつたのだらう。

「幸運にも現場に居合せました。ではこれより『亞神狩り』を遂行します。」

端的に話を済ませ、通話を切ると同時に駆け出すレベッカ。それにハロルドが追従する。

駆け出す先は『亞神』と呼ばれ、先程女性を握り潰した存在。神の字と余りに懸け離れた異形の怪物。

背中^{こんじき}いっぱいに手を生やし、身の丈は周りの街路樹程。双眼は狂気の金色に染まり、体は泥炭が如く漆黒。

対峙するは華奢な体に得物を纏う少女と、服装以外は今時の青年。レベッカは後ろ腰のナイフを右手で鞘より抜き放ち、順手に持つと亞神に向け、左手はホルスターに対し微妙な空間を取り、そこに固定された。

ハロルドは背中の大刀をゆっくりと正眼に構える。2人の準備は万端らしい。

対する亜神も次の獲物を探しあぐねていたせいか、2人組に気付くのにさほど時間はかからなかつた。

2人組と亜神。僅かな空白の後、先に動き出したのはレベッカであつた。

少女のそれとは思えないほどの脚力で一気に間合いを詰める。遠巻きに拳銃の引き金を引くのは周りのせいで憚られたらしい。

異形の腕が怒濤の如く押し寄せる。しかし波の先に獲物は居なかつた。

それを認識した刹那、刃によつて腕の幾つかが切り落とされたのである。

哭鳴、続けざまに再び刃が疾る。

残された腕が滅茶苦茶に振り回されると、白刃の主は動き出す前の場所におさまつた。

「どーすんだ、俺が首をバッタ斬るか？ それともお前が脳天に弾タ丸をブチ込むか？」

「残つた腕は任せた。急所と仕上げは私がする。」

「りょーうかい、いつもどうりつて事ね。」

「アレも使うのか？」

「バックアップしてよ」

「当然でしょ、マスター主」

僅かなやりとりの後、2人が動き出す。数多の観客は気付かなかつただろう。彼女の瞳が灰色から朱色に変じた事を。

数本切り落とされたと言つても亜神の腕は背中一杯にうじやうじや蠢いている。オマケに伸縮自在のようで、ひつきりなしにレベッカとハロルドに手が伸びてくる。ハロルドはバカ丁寧に一本一本切り落とし、レベッカは避けたりかわしたりを繰り返す。

特にレベッカに注意を払っているようで、なかなか本体に近付かせようとはしない。

「キリがないな。」

ぼそり、と声が聞こえた。

刹那、空間が破裂する。火薬特有の炸裂音と硝煙の香りが辺りに波紋より速く伝わる。

2発目、最初の炸裂音から秒を数えるほどの時間すら経っていない。その音と香りの発生源は引き金も撃鉄も、何もかも白く、名工が作ったかのような銀細工が控えめに、しかし厳然と存在を主張する純白の拳銃であつた。銃口は天に向いている。威嚇射撃、ということだらうか。

所持者の少女、レベッカは朱色の眼で、ただ冷徹に目の前の亞神を見つめていた。

ほぼ半々で2人の相手をしていた手の割合がおおよそ7対3になる。7は言うまでも無くレベッカのほうである。その手が五指をすぼめ、突き出す。俄かに彼女を襲う無尽の槍が現れたのである。あわや串刺し、と言う直前レベッカの姿は消えた。

「遅い」

声の直後、炸裂音が無数に放たれる。発砲者は亞神の上空、棒高跳びでもしたのではと思う場所を飛んでいた。

彼女が何より恐れたのは（起こらないという絶対の自信が有りはするが）流れ弾が一般人を襲う事態である。ある程度の冷静を取り戻せた人々が今自分達を囲つている。

彼女の銃弾は人の胴体の三倍もある亞神のそれを易々と撃ち抜く。たとえ一発でも不注意に発砲すれば亞神に浅手にしろ深手にしろ与える代償として、確実に命の灯火に息を吹きかけかねないのである。

だが、上空からなら違つ。弾丸は亞神を貫いた後、コンクリートジャングルの土壤に埋まるだけである。

亞伸の腕が反応しきれない。弾丸は全て体躯を貫き、直後に慟哭。痛みを誤魔化す為か、しきりに一番大きな両の腕を地面に叩きつける。

そつこつするうちにレベッカの足は、柔らかく、真綿の上に着地するかのようにゆっくりと地面に降り立つた。位置は亞神を挟んで丁度バカ丁寧な仕事をしていたハロルドの反対側である。

またも炸裂音が響く。狙いは1、2回目と同じく天に向けてである。

「はいはーい、わかつたよ、主」^{マスター}

亞神の向こう側から氣の抜けた声が返つてくる。ハロルドのものだ。すると先程の弾丸は威嚇ではなく、何らかの号砲であつたらしい。

「カウントは俺でいいか？ んじゃ、5、4…」

再び氣の抜けた声。『カウント』が始まるとレベッカは拳銃のグリップからマガジンを引き抜き、パンツのポケットに無造作に仕舞われた予備のマガジンを拳銃に叩き込み、同時に右手のナイフを腰にある鞘に戻す。

「…2、1、0！」

カウントが終焉を迎える、それは一見大道芸にも見える芸術の始まりであった。

レベッカに両手で握られた拳銃が咆哮を上げる。ひつきりなしに射出される弾丸の狙いは人で言つ両胸の中間より僅かに右寄り。間違いなく心の臓を狙つてゐる。

そんなことを本能的に知覚した亞神は迷い無く心の臓の前に無数の手で壁を作る。だが体躯を易々と貫通する威力を持つ弾丸は何重もの小骨と肉の壁では止まつてはくれない。

やがて弾丸は手を貫き、胴体も貫き、その途中で心臓も貫く。そして弾丸は威力を落とさぬまま黒山の人だかりへ飛び込む……ことは無かつた。

甲高い金属音。それはハロルドが弾丸を叩き落とす音であつた。続けざまに鳴り続ける炸裂音と金属音、奇妙な一重奏デュエットが幕を閉じれば、亞神の腹には蜂の巣はおろかぼっかりと空洞エアホールが出来上がつていた。

遂に亞神を支えていた一番大きな両の腕が崩れ落ち、亞神の身体も重力に逆らうことなく地に伏した。

ひと段落が付いてから、ようやく青とも藍とも付かない制服を身を纏つた公務員達が駆けつけた。異形を恐れたか、黒山の人だかりに道を塞がれたかは定かではないが。

で、その異形を殺めた当の本人達は既に例のホテルに居た。レベッカは自室のベッドに横になり、ハロルドはその傍で雛翅に籠一杯に渡された枇杷の実に齧り付いていた。

「んー、お仕事お疲れさん。おつ、美味そうな枇杷じゃん、食わせろ」

そういうながら入ってきたのは雛翅である。

「お前が腹一杯とかほざくから貰つてやつたんだろうが。今更やる気には、なれん」

「いーんだよ、お前が食つてると食いたくなつてきた。それに、ほれ、甘いもんは別腹で分解されて別腸で吸収されるから」

「都合の良い身体だ。・・・ほれ」

なんのかんの渋りながら結局枇杷を雛翅に投げて寄越すハロルド。「あんがと」といわんばかりに頬を緩ませた雛翅をみて「太るぞ」と心の中で呟いていたが。

「むぐ・・んぐ、『ぐくん。次の、がぶ、お仕事・・もぐもぐ、ふあがな』

「食うか喋るかどつちかにしろ、雛鳥。行儀が悪い」

「・・・『ぐくん、ふう。さて、次のお仕事なんだが・・・」

「枇杷なら言い終わるまでやらんぞ」

すっかり胸のうちを読まれた雛翅、「ケチ」と呟いたのがハロルドに聞かれたか否かはわからない。

「暫く日本に留まれ、だと。レベッカの本家が言つてた」

「どうしたことだ？」

「助力者のアタシが知るわけ無いだろ？ とにかく、下宿でも見つけた方がいいかもね。なんか長くなりそうだよ」

「わかった。いずれ借家でも巡る」

「なーんか、さ。最初の頃のイメージと違つただよねー。あんたらの家業つてさ」

「？」

「始めは名前に負けず劣らず陰鬱とした奴らばかりだと思つてたんだよね、アタシ」

「ま、そんな奴が居ない訳でもないがな」

「でもさ、優しいよね。レベッカつて」

「どういう風の吹き回しだ。雛鳥が、らしくない」

ハロルドがさも意外、といわんばかりに視線を雛翅に向ける。そんな視線は意に介さず、雛翅が続ける。

「だつて亞神つて研究の後、焼却処分なんだろ？ 悔穢に満ちた目線とか、遺族の憎悪とかをうけながら、さ。

そんなのに花を手向けてるレベッカつて優しいなーなんて思つてね」「あの白いカーネーションは、まあ俺らの中でも物議が出た。当然だ。墮天使が狩るべきものに対して花を手向けるなんてありえないつてのたまう奴が居た」

「今はどうなつてんの？」

「今は槍玉にこそ上がらないが反感を持つてる奴が少なからず居る。そいつらからこいつを護るのが俺のもつ一つの仕事だ」

「・・・ま、がんばれ。お金なら出せるだけ出したげるから

「ああ」

それで雛翅は部屋を去つた。後に残されたハロルドは枇杷を齧りながらレベッカを見る。

彼女の背負う荷物は余りにも多すぎる。それを少しでも軽くしてやるのが自分の仕事だ。その為ならどんな犠牲も厭わない。安らかに眠るレベッカの髪を撫でながら彼はそう思った。墮天使の静かな夜は更けていった。

（後書き）

・・・いかがだつたでしょ? 短編のお勉強も兼ねて書いてみたんですけど。修正するべき点などについてはよろしければドンドン小説評価に書き込んでください。個人的にはバトルシーンが一方的だったかなー、って思つてます。

で、私事ですが、最近「ひぐらしの く頃に」と「と香辛料」つて本に嵌りました。

でも「ひぐらし」みたいなホラー系はダメなんですねー。ギャグシーンが多少中和してくれるからいいものの。それを図書室で借りて読んでた頃は寝不足でこつちが死にそうでした。

「香辛料」の方は剣も魔法も無いファンタジー。でも面白い。ヒロインがメツサ可愛いんで良かつたら書店で手にとつて見てください。別に回し者じゃないですがw

それでは批評を楽しみにお待ちしています。ペンネーム変えようかなー、とか思つてる天満月でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5406e/>

next to G O D

2010年12月26日01時50分発行